



8月中旬から約10日間にわたり、バンコク郊外の総合展示場で、タイ科学技術展が開催された。国民の科学技術への関心を高めるためにタイ科学技術省およびタイ国立博物館が毎年主催し、例年100万人以上が来場する科学技術に関するタイ最大のイベントである。タイ国内の教育研究機関や企業のほか、インターナショナルパビリオンでは日本、韓国、中国、フランス、ドイツなどが出展し、科学技術開発の成果をパネルや模型を使って紹介していた。

タイ科学技術展に小中生

子どもたちで展示ホールは埋めつくされていた。体験型のブースでは、直接モノに触れ、考え、熱心にメモを取る子どもたちもいた。

チェンライ県で13人の少年たちが洞窟から救出された内容も「テクノロジー」として紹介され、狭い洞窟を擬似的に体験できるよう演出されていた。中学生の研究ブースでは、各中学の代表による研究成果の発表が行われ、審査員に熱心にプレゼンを行っていた。

「工場から出されるアンモニアを早期に感知する装置」を作ったサッタリ女子中学のプラワさん(14)に話を聞いた。「科学には興味があり、1万バーツ(約3万円)の費用で公害や火災を防止するための装置を製作した。将来はドイ

日本の技術、伝える時代

「ツへ留学したい」と流ちょうな英語で話してくれた。

タイ科学技術展を見学する子供たち
 〓タイ・バンコク郊外



タイの投資促進策によると、アセアンの製造ハブの中心になるには、研究開発拠点の強化が必要と言われている。今後の高齢化社会による労働力不足などを見据えた人材育成、特に、エンジニア、サービス分野、ＩＴロボット開発分野は急務とされているが、プレゼンをする中学生の姿を見ると「タイには優秀な人材はたくさんいる」と感じた。

各分野で高度技術を得意とする日本企業にとって、今以上に技術開発、研究のおもしろさをうまく子供たちに伝えれば、タイも自動車の製造拠点だけではなく、技術開発のハブにもなるのではないだろうか。これまで労働力確保だけの目的で日系企業は進出してきたが、「タイの子供たちに日本の技術を伝える時代の到来」を確信した。

(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)